光ある人生を歩む

はじめに

本年二〇一八年は、山形放送からＰＢＡ「世の光」番組が放送されるようになって50周年です。この記念の年の「リスナー・サンクスフェスタ」に併せて、このような山形オリジナルの『メッセージ集』がつくられました。

この『メッセージ集』は、二〇一二年～二〇一四年の三年間、その年の春先の一週間、山形「世の光」放送スペシャルウィークとして特別に山形県内の牧師・伝道師が五人ずつ日替わりでバイブルメッセージを担当したものです。実は、この企画はＰＢＡの「世の光」放送の働きをより身近に覚えていただくために、ＰＢＡのスタッフの方々に山形県内諸教会を訪問していただいた時に併せて行われたものでした。一度放送を通して流れたことばが、目に見えることばとして文字化されることによって、もう一度主の恵みを覚えることができることを心から感謝したいと思います。

山形「世の光」放送伝道協力会　代表　**鳥居 完次**

もくじ

【二〇一二年放送】
「神の愛を体験する」川崎 廣 …… 6
「地の塩・世の光」菊地百合子 …… 8
「私たちの希望」高内 健 …… 10
「キリストにある幸いな人生」大内秀子 …… 12
「あふれるばかりの愛」鳥居完次 …… 14
【二〇一三年放送】
「暗闇を払う光」大橋不三男 …… 16
「天国への道」紺野真和 …… 18
「迷いの中から」河野増美 …… 20
「命を捨てるほどの愛」千葉顯一 …… 22
「勝利の人生へ」名和英光 …… 24
【二〇一四年放送】
「宝石のような言葉」中野 務 …… 26
「神は真実な方」高橋富三 …… 28
「罪責感からの解放」金野正義 …… 30
「聖書を読んでみよう」須田勝信 …… 32
「人を造った方」後藤志津 …… 34

「神様の愛を体験する」 川崎 廣

皆さんがお聴きの「世の光」は四十三年ほど前に始まった長寿番組の一つです。私は、この放送が始まった最初の時から関わってきましたから、今日はこのようにして皆さんにお話できることを大変嬉しく思っています。私たちの教会は、教会堂を持たずに家で集まっていますので、「家の教会」とも言うことができます。

さて、教会とはどのようなところでしょうか。聖書の中に、「教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。」（エペソ人への手紙 一章二十三節）と書かれています。教会は、イエス・キリストの恵みに包まれたところです。神様の愛が満ちているところです。神様はこの世界を創られ、私たちを愛し、その必要なものをすべて満たしてくださるお方です。

昨年、三月十一日に起こった東日本大震災は大変な災害でした。（※二〇一二年に放送されたものです。）私はこれまで何度も被災地に出かけて行きましたが、全国各地から多くの支援の働きがなされています。また世界各地からも、特にキリスト教関係の団体や個人から多くの支援がなされています。

先日、このような話を聞きました。気仙沼市本吉町でサンマ漁をしておられる方の話ですが、船が流され、家が全壊し、命からがら逃げて助かったそうです。内陸の方から何度も救援物資を届けてくれた牧師さんにこう言いました。「オレは本当にみんなから力もらったよ！ ありがたかった。教会の人と出会って、本当にオレの人生変わった！ あの時、オレは何にも力が出なくて、下しか見られなかったもんなぁ。そして、『何か必要なものないですか？』って言われても、遠慮して何にも言えなかった。それでも、オレも甘えてみようかなと思ったんだ。オレは嬉しかった。教会のみんなと出会えて本当に力もらったよ！ 教会の人と出会うと、初めての人なのに昔からの知り合いのような気がしてくるんだよなぁ。あんたたちの神様はすごい神様だなぁ。オレは本当に嬉しいよ。」あなたもこのようなキリストの愛に出会うために教会にお出でになりませんか？

「地の塩・世の光」菊地百合子

私の父は二十二歳の時、メガネのガラスで左の目をケガして失明。以来、義眼をして今日に至っています。その暗闇の失意の中で、ラジオの「世の光」を聴き、生まれて初めてキリストの教えに接し、聖書通信講座を受けてクリスチャンとなりました。片方の視力は失いましたが、心の目は開かれました。

私には二人の子どもがいます。その子たちの名前は、聖書の「あなたがたは、地の塩、世の光です。」という言葉からつけました。塩と光です。今日はこの聖書の言葉からお話ししたいと思います。この言葉は最上の褒め言葉です。まず塩は、古代社会において非常に貴重なものであり、その特質は今日においても大変有益なものです。

子どもの夏休みの自由研究で、塩について調べ、多くの発見をしました。塩は人体の体温調節、新陳代謝を促し、消化を助けます。食物の長期保存を可能にし、味付けをし、栄養価を高めます。青菜を色鮮やかに茹で、果物の変色を防ぎます。貨幣として用いられた時代もあり大変有益なものです。

続いて、「あなたがたは、世の光です。」と言われていますが、光にも有益な特質があります。聖書の初め、創世記を見ますと、神様は光を一番最初に造られました。なぜ光が最初に造られたのでしょう。それは、世界と人間が生きていくために一番必要なもの。なくてはならないものだからです。混沌とした闇の世界を光が明るくしました。光によって人は見ることができます。光がないところでは何も見えません。光にはものすごい速さでまっすぐに進む性質と、反射する性質があります。光から熱が生まれ、暖め、植物を光合成により成長させます。光は足元を照らし、危険を知らせ、迷わず道を歩く助けをします。灯台の光は航路を照らし安全に港に導く目印となります。この光の特質は人間に豊かな恩恵を与えます。塩と光が持つ特質は、私たちの内からは生まれてきません。まことの光であるイエス様からいただくことのできる恵みです。「地の塩、世の光」としてくださるイエス様の愛を感謝いたします。

「私たちの希望」高内 健

どんなに文明や科学が進んでも、どうしても解決できないことがあります。それは罪の問題です。罪とは神様を悲しませる自己中心の心です。

私たちに罪を解決する力はありません。しかし、罪の問題を解決できる方がたった一人だけいます。その方はイエス・キリストです。

昨年起きた東日本大震災を通して、イエス様の十字架の死とよみがえりによる数いが、私にはより深くわかってきました。ある場所に行った時は、三階か四階のビルの屋上に、一軒の家がのっていました。そこまで波がのり上げたことに大変驚きを感じました。大きな津波によって多くの命が一瞬にして奪われました。辺り一面、積もったヘドロを取り除くのは大変困難な作業です。ある方は百年分のヘドロが一気に巻き上げられ堆積したとも言っています。

しかし考えてみれば、私たちの罪は目に見える津波以上に大きく破壊的です。しかも一瞬にして人の命を奪うこともできます。それだけでなく、じわじわと人間の中に染み込み、人間の人格、家族関係、社会をも確実に破壊してしまうような想像を絶する破壊力があります。ヘドロは百年かもしれませんが、人類の罪は数千年も堆積したものです。

しかしイエス様は、この大きな大きな罪の荒波、そしてヘドロよりももっとドロドロとしたきたない罪を、ご自身一人で十字架上で身に受けられて死なれました。イエス様は、自らの壮絶な十字架の死と復活によって私たちを罪から救ってくれました。それは、絶望を希望に変えるものです。聖書には、「この御子（イエス・キリスト）のうちにあって、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。」（コロサイ人への手紙 一章十四節）とあります。よみがえられたキリストにある希望、それは、私たちの内にある罪が赦され、神と共に歩む希望です。

このイエス・キリストを、ぜひ自分の救い主として心の中に迎え入れてください。大きな希望があなたの心にあなたの人生に与えられます。

「キリストにある幸いな人生」大内秀子

今日はだれでも、いくつになってもイエス様を信じるなら、心の向き、人生が変わる幸いについてお話ししましょう。

昨年、私は大好きな父を九十四歳まであとわずかという日に亡くしました。認知症が進みつつあった最後の約二年半を私たちのところに迎え、心和む会話や祈りも共にできたことを感謝しています。寂しくはありますが、母も先に天に召され、天国をますます近くに感じています。

宗教嫌いの父が教会に行くきっかけとなったのは母の死です。まるで結婚式のように美しい花々で飾られた希望に満ちた告別式でした。父はこの日、確かに神様に心動かされたのです。死は終わりではなく、イエス様を信じ仰ぐ者にとっては死はふすまを開けて隣の部屋に移るようなもの。神と共にある生涯はいつまでも続くことを感じ取ったのでしょう。

葬儀の次の日曜日から毎週、近くのその教会に通うようになりました。そして翌年、彼は八十三歳でクリスチャンになり洗礼を受けたのです。洗礼式のその日、みんなの前で話したメモの一部をお読みします。

「福島県の私の生家は、天台宗で仏壇と神棚に毎日手を合わせる習慣がありました。しかし妻の死、そして教会での葬式が教会に足を向けるきっかけとなりました。今、耳の遠い私にも、近頃やっとイエス様のお言葉が聞こえるようになりました。また、イエス様の十字架が私たちのためであったことがわかるようになりました。」父はこのように話していました。

父はそれまで神様を全く知ろうともせずにいましたが、十字架のイエス様を通して神様に向き直ったのです。そして、歩ける限りは教会の日曜礼拝に行っていました。その父と母は今、「再会」と刻まれた横浜の公園墓地に眠っています。あなたもいかがですか？イエス様によって、新しい心と希望のある人生を始めませんか？

聖書のことば、ヨハネの福音書 十四章六節「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」

「あふれるばかりの愛」鳥居完次

私は一九四七年、横浜で生まれ育ちました。今思い出しますと、私が育った家庭は、ある程度キリスト教的雰囲気の中にあったように思います。私が小学三年生くらいの頃から、母が教会に行くようになりクリスチャンとして歩んでいたからです。家の中には聖書が身近なところに置いてあって、開いてみたこともありましたが、聖書に記されてある天地創造の神様の存在など、まともに受け入れることはできませんでした。その後、高校を卒業し、一人甲府で大学生活を始めました。すると早速、筆まめの母から、毎週のように手紙が届くようになりました。その手紙の最後はきまって、「日曜日は何をしていますか？　教会に行ってごらんなさい。」というもので、ある時はなんとそこに市内中の教会名とその住所が書かれていたのです。

ところが、大学三年になったある日、クラスメートから大学の近くにある教会の特別集会に行かないかと誘いをうけました。そのあまりの熱心さに動かされて集会に出席しました。その晩、心から思わされたことは、とにかくこの私にあふれるばかりの愛の配慮をしてくださっているお方がいる。もしそのお方がいるならば、そのお方に従う道を歩んでみようということでした。それは、実に不思議な経験でした。その晩、教会から下宿まで帰る途中に、ふと見上げた星空が、いつも見ていたはずなのに、それまでとは全然違って見え、まるで宝石のように輝いていたのを今でもはっきりと覚えています。それからもう四十五年経ちますが、確かに神はイエス・キリストを通してご自身の愛を溢れるばかり注いで下さっていることを日々実感しています。

さて、天地万物を造られたまことの神様は、あなたにも溢れるばかりの愛を注いで下さっています。いや、注ぎたいと願っておられます。あなたもぜひお近くのキリスト教会に行ってみてください。

聖書のことば「神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。」コリント人への手紙 第二 九章八節

「暗闇を払う光」大橋不三男

聖書の中にヨブという人が登場します。彼は正しい人でしたが大きな苦しみを受けた時、次のように神様に叫びました。

「私の生きる日はいくばくもないのですか。それではやめてください。私にかまわないでください。私はわずかでも明るくなりたいのです。……そこは暗やみのように真っ暗な地、死の陰があり、秩序がなく、光も暗やみのようです。」

大きな試練が襲ってきた時、神様が正しいというヨブでさえその苦しみの中で、私はわずかでも明るくなりたいと願ったのです。このヨブの苦しみを聖書で読みながら、私は若い頃の自分の心の葛藤を思い出しました。その頃、私の心は希望がなく真っ暗でした。特に二十五歳の頃は最悪で、早く死ねば楽だと思いました。ただし、若死にしたら両親に申し訳ないという気持ちがあり一千万円くらいの生命保険に入りました。それで少し気が楽になり仕事を続けることができました。ところが二十八歳の時、真夜中に気持ちが悪くなり、トイレに行って倒れ、手や足が痙攣を始めました。普段私は早く死ねば楽だと思っていたのですが、その時、大声で助けを求めていたのです。救急車に乗って病院に着くと痙攣がおさまりました。検査結果は異常なしで、お医者さんはストレスのせいだろうというのでカウンセリングの予約をとってくださいました。カウンセラーは教会の牧師さんでした。私は牧師さんに、「自分はまじめに生きようとしているのに、心の中が暗くて生きているのが辛い。」と訴えました。一時間くらい話を聞いて下さって、「若い時の私もあなたと同じでした。心は荒み暗闇のようでした。でも楽しく明るく生きなくては損ですよ！」とアドバイスをして名刺を下さってカウンセリングが終わりました。

私は一枚の名刺を大切にしまい、この先生は人生を明るく楽しく生きる秘訣を知っている方だと確信しました。それから私は、半年のちに教会の前に立ちました。それは水曜日の夜でした。教会に入ると、聖書の中から「幸いなことよ。全き道を行く人々、主のみおしえによって歩む人々。」というお話を聞きました。そこには暗闇を払う明るい光がありました。ぜひ、あなたもその光を知っていただきたいのです。

「天国への道」紺野真和

以前、「西の魔女が死んだ」という小説を読みました。おばあちゃんと孫娘の話です。中学生の孫娘は不登校になった時、田舎に住む大好きなおばあちゃんとしばらく生活することになりました。そんなある日、おばあちゃんに、「人は死んだらどうなるの？」と聞きました。この問いは、彼女がずっと考え、恐れ、悩み続けてきたものでした。それはお父さんから、「死んだらもう何もわからなくなって、もう何もなくなるんだ！」と話されたことがあったからです。するとおばあちゃんは孫娘に、「つらかったね。」と優しく語り、「私は人には魂というものがあると思っています。死ぬということは魂が体から離れることだと思っています。」と話しました。その話を聞いて、孫娘は長い苦しみから解放されました。

さて皆さんは、死後どうなると考えていらっしゃるでしょうか。死後、魂が存在せずに肉体の活動が停止したら、すべてが終わりと考えておられるでしょうか。それは、あまりにも悲しい考えではないでしょうか。クリスチャンだった私の祖母は、九十七歳の時に病院で、私が手を握ってお祈りしている時に静かに呼吸が止まり亡くなりました。その瞬間、私は祖母の魂が神様のみもとに迎えられたことをおぼえました。聖書は人の死後について何と語っているでしょうか。聖書は、人は肉体だけでなく、魂を持つものとして作られ、肉体の活動が停止しても魂は永遠に存在すると語ります。さらに素晴らしいことに、神様の定められた時に体がよみがえることも語っています。その体とは、朽ちることも、汚れることもない、新しい、完全な体です。聖書は地上で別れた愛する方と新しい体をもって再開し、神様のもとで歩めることを約束しています。

イエス・キリストは、地上の生涯の最後に、二人の強盗と共に十字架につけられましたが、その時イエス・キリストを信じた強盗に、「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」と語られました。天国への道を開くために、神の御子であるイエス・キリストは、私たちの罪の身代わりに十字架にかかり死んで下さいました。このイエス・キリストに希望をおいて共に歩んでまいりましょう。

「迷いの中から」河野増美

私は愛媛県松山市で四人兄弟の次女として生まれました。高校一年の三学期頃から私はどこから来てどこへ行くのか？　私は何のために生まれたのかの答えを探し始めました。私のことをすべてわかり愛してくれる人を探しました。

十八歳の夏の夕方、思索しながら散歩していた時、青年たちによるキリスト教の路傍伝道の一隊とすれ違いました。その夜の集会案内を聞いた時、答えを見つけようと一人で初めて松山ホーリネス教会に行きました。その教会の牧師が、十八歳の私に神の前に罪を悔い、ごめんなさいという時を持って下さいました。その後、夜の集会に出席し続け、ある時、神様が私のことも知ってくださり愛してくださることがわかり、私もこの神様を信じていこうと決心しました。

青年キャンプに参加した十九歳の夜、ささやく静かな声を聞きました。「むしろ自分自身のことのために泣きなさい。」ルカの福音書二十三章二十八節。私自身が罪人であること、罪があると永遠の滅びに至ること、イエス・キリストはいつまでも死なない永遠の命を与えるために、私の罪のために死んでくださったことが初めてわかりました。そして一週間後、洗礼を受けました。

私は両親に愛され育てられました。しかし、その愛がわからず親に対して、わがままいっぱい生きてきました。年齢が高くなると共に、親の愛がわかるようになりました。子どものわがままをすべて受け止めて、尚、愛し続けてくださる人は親の他にはいません。子どもを慕ってやまない親の思いの中に神様の愛を見ます。私のわがままな思いの中に、人間の罪の姿を見ます。自分が迷子であることに気づき、魂が呻き苦しみましたが、イエス様によって救い主に帰ることができ安心しました。この方との交わりによって私の日々の生きる力をいただいています。ハレルヤ！

「命を捨てるほどの愛」千葉顯一

みなさんは、ヘレンケラーという人をよくご存知だと思います。彼女は二歳で高熱を出し、視力、聴力を失い、そして、話すことさえできなくなってしまいました。やがてヘレンは、すっかりわがままな子として育ってしまいます。手をやいた両親は、ヘレンのために家庭教師を派遣してほしいという手紙を盲学校に出し、まだ二十歳という若いサリバン先生が家庭教師としてやって来ました。しかし、その教育は大変なものでした。二十歳といえば友達と遊びたい、おしゃれをしたい、おいしいものを食べたいなどと、やりたいことはいっぱいあったでしょう。しかし、サリバン先生はヘレンのために尊い犠牲を払ったのです。

では、どんな犠牲を払ったのでしょうか。まず自分の時間という犠牲を払いました。サリバン先生は普通であれば数分で終わるようなことを、ヘレンのために何十分も時間をかけ教え続けました。また労力という犠牲を払いました。ヘレンに何とか言葉を教えるために、ヘレンの手をとって、自分の口の中に入れ、口の大きさや言葉を発する時の振動などを覚えさせてヘレンに言葉を教えたのです。そのためサリバン先生は、何度も吐くことがあったそうです。そして、ついにヘレンは初めて「ウォーター」という言葉を発しました。

しかし、サリバン先生が払えなかった犠牲があります。それは、自分の命を捨てるという犠牲です。どんなに私たちが周りの人に愛を表現しようとしても、私たちには限界があります。けれども、イエス・キリストはちがいます。このお方は人間の罪の結果がもたらす罰をあなたにかわって、すべて肩代わりするために十字架にかかってくださったのです。しかも、ご自分は何一つ罪を犯したことがないにもかかわらずです。

聖書のことばをご紹介します。「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」ヨハネの福音書 十五章十三節

イエス・キリストは、ご自分の命を捨てるほど私たちのことを愛してくださっています。あなたのために注がれたこの愛を、今あなたも受け取りませんか？

「勝利の人生へ」 名和英光

聖書の中に、「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また、『何の喜びもない』と言う年月が近づく前に。」とあります。大宇宙の創造者と同時に、あなたの創造者がおられるというこの事実に目覚める時、それまでとは全く異なった人生観が開かれます。「空の空」でない豊かな人生を見出します。たった一度の人生を、悔いのない勝利の人生にしたいものです。人生は多くの分岐点に立たされます。進学、就職、結婚、いろいろな試練に直面します。そして、その選択が人生を左右します。人間は神によって造られ、命が与えられているのですから、そこに必ず目的とおのおの生きる人生のコースが与えられています。

小学校の先生であったある方が、四十二歳で特別教育功労賞を受賞、特殊教育の草分けとして模範教師、模範学級として表彰されました。しかし影にあって、教師にふさわしくない生活、子どもに見られたら恥ずかしい生活、子どもを踏み台にして出世しようとしていた自分に行き詰まり、悩み、良心の呵責に苛まれていました。

ある日、学級の一人の障がい児より「教会学校のクリスマスの劇に出るから写真撮って。」と頼まれたことがきっかけで、生まれて初めて教会に行き、聖書を読み、学ぶようになりました。そして、自分の罪深さ、十字架による罪の赦し、神の愛を知り、悔い改めてキリストを信じました。罪の赦しと清めを経験し人生が新しくされました。それから障がい児教育とそのケアのために生きることが神が与えてくださった使命と確信し、障がい児学級を退職するまで担当し、退職後は障がい者授産施設を立ち上げるなど、九十一歳で天に召されるまで障がい者と共に生きられたのです。

私たちの努力では人生をチェンジすることは困難です。しかし、天地を創り、私たち人間を造ってくださった方を覚える時、神は私たちの人生を悔いのない、勝利の人生へと変えてくださるのです。

聖書のことば「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また、『何の喜びもない』と言う年月が近づく前に。」伝道者の書 十二章一節

「「宝石のような言葉」中野 務

聖書には多くの宝石のような言葉がちりばめられています。その一つをご紹介します。ヨハネの手紙 第一 四章九節には、「神はそのひとり子（イエス・キリスト）を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。」とあります。

私は小さい頃から、なぜか一人でいることが多かったのです。ひ弱で病気がちだったので、あまり相手にされなかったのかもしれません。でも、私にはそのほうがある意味で楽だったのです。ところがある日、突然道端で聖書の話を聞きました。神の子イエス・キリストが、私に心をとめ、救い、まことの命を与えるために十字架で死んでくださったというのです。先の聖書の言葉と同じです。私はその言葉を聞いてすぐに信じ救われたいと願い受け入れました。それからの私は、人とのつながりも煩わしくなくなり、仕事にも心おきなく向かうことができるようになりました。

ある脳学者によると、脳には生きたい、知りたい、仲間になりたいという本能があるということです。その本能が満たされないと幸福な豊かな、そして確かな人生を送れないというのです。脳の働きを阻害するものは何でしょうか。悪い習慣、悪い思い、悪い言葉などです。それは、聖書の示す汚れた心、悪しき心、罪の心のことです。神から遣わされたイエス・キリストにはそれを取り除く力があります。人の努力や思いは無力です。もし、あなたがキリストの十字架を受け入れるなら、私が体験したようにあなたも生まれ変わり、いきいきとした人生を送ることができるのです。ぜひあなたもこの宝石のような聖書の言葉を受け取ってください。

「神は真実な方」 高橋富三

今日のお伝え申し上げたいことは、「神は真実な方」です。私は酒屋に生まれ、酒がいつも身近にありました。酒の好きな方を身近に見ておりました。特に高校生になって、悪友が「富三！酒を一本持ってこいよ！」と言われることもありました。私の気持ちはあのような酒飲みの大人にはなりたくないでした。ある時、いつものように酒の配達に出かけました。玄関に立って「毎度ありがとうございます。」と入って行きました。するとその家のお父さんが酒に酔っ払って大暴れしているではありませんか。口汚ない言葉を発して大声で怒鳴っている。その場面を見て私はハッとしました。「毎度ありがとうございます。また、よろしくお願いします。」とは言えなくなってしまいました。帰りの道すがら私は思いました。私の家は何と罪作りな職業なのだろう。聖書を読み、説教を聞いていくに従って、より一層強く、あのような酒のみの醜い大人にはなりたくないと思いました。

酒飲みの醜さを目にしては軽蔑する自分ですが、自分には人知れず抱えていた問題がありました。それは短気な性格、親からは「富三！　短気は損気だよ！　もう少し我慢強く辛抱できるようになりなさい。」と注意されることが多くありました。そのような自分に気づいたのですが、酔っ払っている人を見て、外も内側の心も醜いかもしれませんが、実は、私は酔っ払ってはいない自分、正しいというが、心の中では短気でわがままで自己中心、まさに私の内側は、酒飲みよりももっと醜いという現実を認めざるを得ませんでした。私は外側を見せかけている分だけ偽善者、それだけ罪深い者ということに気づいたのです。それで、聖書の言葉の前に救いを求めました。

神は真実で正しい方です。「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（ヨハネの手紙第一一章九節）

この時、私は自分の罪からの救いを経験させていただきました。あなたもこの救いをいただいてください。

「罪責感からの解放」金野正義

人は誰でも失敗するものです。人生の中であんなことしなければと思うような失敗をしてしまいます。私には中学の時に、仲の良い友達がいました。いつも一緒にいて一緒に馬鹿なこともしました。しかしある時、私はその人を傷つけたのです。鈍感な私はすぐにこのことに気がつけず、だんだん関係がおかしくなってきて、初めて相手を傷つけてしまったことに気づきました。関係を修復できず、次第に言葉さえ交わさなくなり、そのまま中学を卒業、別々の高校に進学しました。

ある時、帰宅途中に中学時代のクラスメートに会いました。「おい、おまえ知ってる？　おまえと仲が良かった○○。あいつ、高校退学になったらしいよ。」私はその言葉に心がズキンとしました。友人は中学の時、退学になるような悪いことをする人ではなかったからです。「私があいつを傷つけなければこんなことにならなかったかも。」私にはそう思えて、自分の心が責められて、責められて、苦しくなりました。それから数年、いつも心の中に重しのようなものを抱えて生きていたような気がします。数年後、私は教会でイエス・キリストの話を聞きます。イエス・キリストは十字架で多くの血を流して死なれたこと。それは私を救うためだったということ。その話を聞いて、私はこの罪責感をイエス・キリストに解決していただきたいと思いました。

集会後、牧師先生のところに行き一緒にお祈りしました。「神様、私はあなたに対して罪を犯しました。友に対して罪を犯しました。どうか、この罪を赦してください。イエス・キリストを私の罪からの救い主として信じます。」そう祈った時からです。私の心の罪責感がうそのように消えてなくなったんです。

御言葉にこのようにあります。「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」あなたも心責められて苦しんでおられないでしょうか。イエス・キリストは、あなたの罪を赦す権威を持っておられるお方です。

「聖書を読んでみよう」須田勝信

フィンランドという国の名前を聞いて何を連想しますか？サンタクロースやオーロラなどを思い浮かべることも多いのではないでしょうか。

少し前のことになりますが、「フィンランドの子ども、なぜ賢い」という新聞記事がありました。北欧の国フィンランドが、国際的な調査でトップクラスを維持しており、その教育方法に注目が集まっていたからです。その新聞記事によると、フィンランドと日本では基本的に勉強の捉え方が違うようです。日本でテスト勉強といえば、問題集を解いたり英単語や歴史の年代を暗記したりということが中心です。しかしフィンランドでは、読むことが中心なのだそうです。「テスト前だから読まなくちゃ。」といった具合に、分厚い本を何冊も読むことが要求され、テストではその知識に基づいて小論文を書かせることが多いのだそうです。決められた問題の、すでに用意されている答えをいかに正確に導き出せるかを勉強と考える日本。一方、本を読んで、自分なりの答えを生み出していくことを勉強と考えるフィンランド。二つの国を比べてみるとこれほど勉強の捉え方が違うのです。この勉強の捉え方の違いが、多くの日本人の信仰心にも影響を与えているのではないでしょうか。

「あなたの宗教はなんでしょうか？」と質問すると、「仏教です。」あるいは、「無宗教です。」と多くの方が答えます。しかし、その中で自分で調べて納得した上でそう答えている方がどれくらいいらっしゃるでしょうか。周りのみんながそうだから何となくと用意された答えを、そのまま自分の答えにしてしまう勉強が信仰の心にも大きな影響を与えているのではないでしょうか。

ところで、ラジオを聴いている皆さんの中で、聖書を開いて読んだことがあるという方がいらっしゃるのではないでしょうか。聖書は毎年6億冊以上が人々の手に渡されている世界ナンバーワンのベストセラーです。これだけ世界中の人々に影響を与え続けているベストセラーを、もし一度も手にして読んだことがないとすれば、これほどもったいないことはありません。今、ラジオをお聴きのあなたも、フィンランド式の勉強を見習って一度聖書を開いてみませんか？お近くの教会にご連絡いただければ、聖書のわかりやすい読み方などを喜んで教えてくれるでしょう。

「人を造った方」 後藤志津

今日は、「人を造った方」という題でお話をします。聖書には、人がどこから来たのかがはっきりと書かれています。創世記というところには、「神は人をご自信のかたちとして創造された。」地球上には、たくさんの人が存在しますが、「神が造られた人」とはどの人を指すのでしょうか。聖書は、「神がすべての人を造ったのだ」と言っています。あなたや私を含むすべての人をです。詩篇というところにはこのように書かれています。「私がひそかに造られ、地の深い所で仕組まれたとき、私の骨組みはあなたに隠れてはいませんでした。あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。」（詩篇 一三九篇十五、十六節）さらにこのようにも書かれています。「主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。」（詩篇一三九篇一～三節）神様は、すべてをご存じの方であると書かれているんですよね。このような神様の前で、私たちはどんなとり繕いができましょう。

今から約三千年前に生きたダビデという人は、この神様に次のように祈りました。「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。」（詩篇 一三九篇二十三、二十四節）

「自分の内には、傷のついた道だらけだ。どうして、この神のところへなど行けようか。」このように思っておられる方はいないでしょうか。聖書にはこう書いてあります。私たちを造った神が、神の子、イエス・キリストの血によって私たちのすべての傷を帳消しにして、私たちをとこしえの道に導いてくださいます。神は聖書を通して、神によって造られたものである私たちへ神自身からの素晴らしいこの知らせを告げています。ぜひ私たちを造った神様を知ってください。

朝一番のビタミン
RADIO 世の光
www.radio-yonohikari.com

amagata yono -hikari 50th

世の光（5分番組 デイリー）
YBC ラジオ　（月）～（金）5:05am
日替わりで聖書からのお話をお届けします。

「世の光」オリジナルメッセージ集
光ある人生を歩む
2018 年 11 月 1 日発行

企画：山形「世の光」放送伝道協力会［50 周年記念］
制作：一般財団法人 太平洋放送協会（PBA）
〒 101-0062　東京都千代田区神田駿河台 2-1 OCC ビル
電話 03-3295-4921　FAX 03-3233-2650